資料４
2023 年 1 月 26 日
第２回環境教育ＷＧ

新治小学校(6,5,1 年生)における赤谷の森体験学習の手引書（案）

1. はじめに

赤谷プロジェクトは発足当初から、持続的な地域づくりの一環として新治小学校における環境教育に関わり続けてきました。近年は、６年生の旧三国街道遠足と、５年生の森林環境教育において連携体制が整っています。2020 年度から小学校の新しい学習指導要領が導入されたことを受け、既存の赤谷の森体験学習を教育の変化に対応させて学校のニーズに応える必要が関係者間で認識されてきました。そこで、2021 年度から新治小学校との連携体制を体系的に整理することを実践してきています。赤谷プロジェクトとの連携による授業の充実が新治小学校として認識されており、赤谷プロジェクトとしても持続的な地域づくりに向けて地域の小学校である新治小学校との連携は重要であるため、両者の連携に継続性を持たせることが求められています。以上を踏まえて本手引書は、赤谷プロジェクト中核三者と新治小学校の役割分担、体験学習の実施時期や内容を検討するプロセス等の明確化を図り、実務者が順応的に内容を充実させながら赤谷の森体験学習を継続していくことを補助しようとするものです。

2. 赤谷の森体験学習の目的

新治小学校６,5 年生の総合学習と１年生の生活科に関わるどんぐり拾い等において、生徒らが、身近な自然の魅力に気付く体験、赤谷プロジェクトに関する学習を通して、地域の自然に愛着と誇りを持つことに繋げる。また、主体的な課題解決の資質や能力を養い、学び方・考え方を身に付けさせ、自己の生き方を考えることができるようにする。

1） 国際的背景

ESD：Education for Sustainable Development は、持続可能な開発のための教育、持続可能な社会の創り手/担い手を育む教育などと訳される、2002 年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議」で日本が提唱した考え方であり、ユネスコを主導機関として国際的に取り組まれています。現代社会の問題を自らの問題として主体的に捉え、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことで、問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらし、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動とされています（文部科学省，“持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）”, https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm）。

2） 国内的背景

新しい学習指導要領では、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていく、「社会に開かれた教育課程」の実現が重要となることが示されています（日本ユネスコ国内委員会, 持続可能な開発のための教育（ESD）推進の手引（2021 年 5 月改訂版））。

3） 地域的背景

新治小学校では「地域とともにある学校づくり」を基本構想とし、学校運営協議会に 2021 年度から本格的に取り組み、子どもの感性を重んじて、「一人一人の子どもの好きを増やす」ことを目指しています。また、赤谷プロジェクトとの連携事業についても整理され、下記のようにねらいを定めています。

①児童が「自然が好き」「動植物が好き」「新治が好き」と感じる活動を実施する。

②教職員及び保護者が赤谷プロジェクトへの理解を深める。

③長期的な視野に立って ESD（持続可能な開発のための教育）に取り組む。

4） 赤谷プロジェクト環境教育 WG の背景

2019 年度、より戦略的に取り組みを進めるために 4 つの主要な対象を明確化しました。2021 年度には、4 つの対象に対して画一的に働きかけるのではなく、地域の次世代を担う子どもに対するプログラムを、地域の若手やネイチャーガイドと協力して作っていくことを目指すことが確認されました。

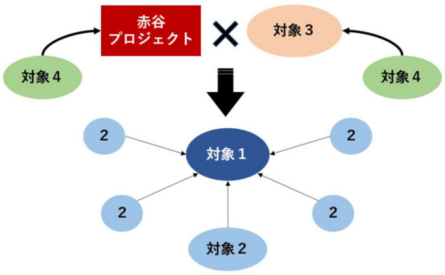
環境教育 WG 主要な 4 つの教育対象

・対象 1 ：地域の次世代を担う子ども

・対象 2 ：地域の若手

・対象 3 ：地域のネイチャーガイド

・対象 4 ：森林管理を仕事とする人



3. 赤谷の森体験学習の主体

1） 新治小学校

総合学習において、自然への関心を高め、主体的な学びの機会として活用します。教科学習においては、効率的な問題解決型学習に取り入れられるものがあれば適宜検討することとします。

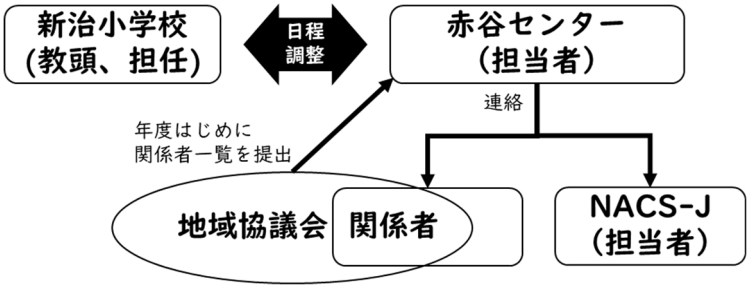
2） 赤谷プロジェクト

赤谷プロジェクトが目標としている「生物多様性の復元」と「持続的な地域づくり」を実現するために重要な人材育成の一環、環境教育 WG の活動として、赤谷森林ふれあい推進センター・地域協議会・日本自然保護協会が協力して企画・実施・改善等を進めます。

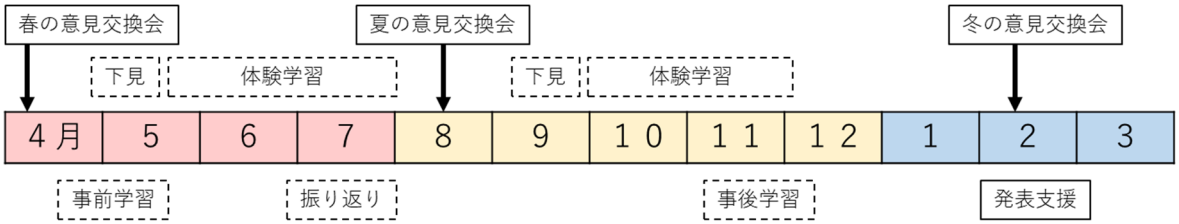
4. 連絡体制

赤谷センターは、学校との連絡窓口と、関係者との打合せの設定、全体像の把握、各セクター担当者や関係者への情報共有の役割を担います。

年度初めに地域協議会が関係者を取りまとめて、体験学習のガイド候補をはじめとする連絡を受け取りたい者の一覧（名前・メールアドレス・電話番号）を提出します。



5. 実施の流れ



1） 春の意見交換会

春の意見交換の時期は、前年度冬の意見交換会で候補日を決めておきます。４月初旬が望ましいと考えられますが、学校の状況に応じて赤谷センターが教頭或いは校長と新年度早々に日程調整をします。赤谷センターの窓口担当者が新任であった場合には、適宜 NACS-J や地域協議会の中で事情を把握している者が日程調整をフォローするように努めます。

◆ 議題例

- 状況の共有（顔合わせ、生徒数・担任の専門教科・配慮が必要な生徒等について確認）
- 体験学習の位置づけ確認（「5. 体験学習内容（案）」参照）
- 体験学習、事前・事後学習等の実施時期・内容検討

2） 日程調整

体験学習の日程調整について、実施時期の２カ月前を目安に赤谷センターが担任と調整して候補日を確認し、中核三者に呼びかけて必要なガイドとスタッフが確保できる日程を決めます。ガイドは 10 人の生徒に最低１人は配置することを目安にします。学校からの付き添い教員数も確認してスタッフとして加味すると良いでしょう。また、念のために予備日も設定しておきます。

3） 事前学習

担当者が明確な場合は、各自が担任と直接打合せ等を行います。複数人が関わる場合は赤谷センター担当者が窓口を担います。実施概要や次に繋がる点等を関係者に共有するように努めましょう。安全のための事前学習は必須とし、体験学習のねらいや時期に応じて柔軟に検討します。

4） 下見

体験学習実施前の１週間を目安にガイド等と日程調整をして下見を設定し、安全面、プログラムの流れ、時間配分、各自の役割等を現地で確認します。下見に参加できないガイド等には、赤谷センターから当日までに下見内容を報告します。尚、当日及び下見の謝金や日当はセクターごとに調整します。また、緊急搬送用の車両についても運転手と配置場所を事前に確認しておきます。

5） 体験学習

赤谷センター担当者が学校及びガイド等関係者との連絡窓口となります。緊急対応やタイムキープのために無線を手配しておくと良いでしょう。簡易トイレは学校が用意しますが、極力使用しないで済むように、バス乗車前にトイレを済ませてもらうことが望ましいです。

雨天等による延期判断は学校が行います。当日プログラム開始の２時間前までを目安として判断し、赤谷センター担当者が窓口となって、ガイドやスタッフ等の関係者に電話等で確実に連絡をします。予備日までに期間が空くなど現地状況が大きく変わるようであれば、再度下見を行うと良いでしょう。

6）　振り返り

当日バス乗車前、或いは体験学習後１週間以内の総合学習の時間を活用して振り返りの場を設けます。生徒の体験活動の成果を言語活動によって定着させ、誤認識を訂正し、探求学習の深化に繋げます。

7）　夏の意見交換会

2022 年度には、授業が無く比較的教員に余裕がある夏休みに延期に伴う意見交換の場を設けました。関係者が参加しやすいように、オンラインでのランチミーティング形式をとりました。必要に応じて、夏までの活動の振り返りや今後の活動の確認の機会として、夏の意見交換会を検討すると良いでしょう。

8）　事後学習

学校のニーズに応じて、生徒の学習成果発表へのコメントや、質疑応答、赤谷プロジェクトの取り組み紹介、制作活動の支援などを行います。

9）　冬の意見交換会

冬の意見交換の時期は、学校行事と授業が落ち着き、次年度に向けた引継ぎ資料を担任が作成する２月初旬から中旬に行うことが望ましいと考えられますが、赤谷センターが窓口となって１月初旬に 5,6 年担任等と日程調整を行うこととします。学校の若手教員研修等と合わせて、他学年の教員に取り組みを知ってもらえる機会にできるとより良いでしょう。

◆　冬の意見交換会における議題例

- 今年度の取り組み成果や課題の振り返りと評価（ニーズ把握、次年度プログラム改善へのアイデア）
- 情報発信（森だより, 環境学習発表会, 信州 ESD コンソーシアム等）に関する支援協力
- 次年度春の意見交換会日程候補の設定

6.　体験学習内容（案）

体験学習の内容は、春の意見交換会において下記を参考に関係者で話し合います。春以降も、学習状況や生徒の興味関心、担任のニーズに合わせて順応的に見直すことが望ましいでしょう。

1）　６年生　旧三国街道の遠足

- 学習のねらい

  5 年生で学習した自然保護の取り組みについてさらに理解を深めつつ、旧三国街道を初めとする地域の歴史や文化に重きを置いた魅力を体感させる。また、これまで学んできた地域の魅力を自分たちの考えで整理し、外部に発信できるようにする。

- 概要

  三坂線入口から東屋等を経由して長岡藩士の墓や三国権現で歴史解説を聞き、三国御神水を経由して三国トンネル新潟側登山口に降りる。三国山のニッコウキスゲ保全についても紹介する。

- 実施時期
  - 案１：ヤマビルが増える前の５月～６月上旬
  - 案２：ニッコウキスゲの花が咲く７月（7/15~22 がベストシーズン）

    ※体力や関心に合わせ、一部の生徒をお花畑エリアへ登らせる場合は、緊急時に対応可能な数のスタッフ確保が課題。
  - 案３：紅葉シーズンである 10 月下旬
  - 案４：社会科で日本史を学ぶ 11 月下旬
- 特に期待される育みたい資質・能力（例）
  - 多面的・総合的に考える力
  - 他者と協力する態度
  - つながりを尊重する態度
- 関連する教科単元（例）
  - ６年社会　日本の歴史（戦国の世から天下統一へ、江戸幕府と政治の安定）
  - ６年理科　大地のつくり（地層のでき方、地層ができるしくみ、私たちのくらしと災害）
  - ６年理科　生き物のくらしと環境（生き物と空気とのかかわり、生き物と水とのかかわり）
  - ６年理科　地球に生きる（人と環境とのかかわり、環境の変化に対応する）
  - ５年理科　天気の変化（雲と天気）

2）５年生　小出俣での森林環境教育

- 学習のねらい

  身近な自然の魅力に気付く体験、赤谷プロジェクトに関する学習を通して、地域の自然に愛着と誇りを持つことに繋げる。また、主体的な課題解決の資質や能力を養い、学び方・考え方を身に付けさせ、自己の生き方を考えることができるようにする。
- 概要

  川古温泉駐車場から小出俣林道を進み、大カツラがある千曲平で折り返して同じ道を戻る。事前学習を通して明確にされた各生徒の目的意識を尊重してグループごとに行動することを基本とする。深い学びとなるように極力内容を絞り、後日他グループの学びを共有する。道中で自然林復元やニホンジカの低密度管理の取り組み等を紹介する。また、センサーカメラを設置する。
- 実施時期
  - 案１：現地での感動体験を最初に位置づけられるよう、雪解け直後に下見を行って５月中
  - 案２：事前学習で生徒各自の目的意識を明確にした上で７月
  - 案３：ヤマビルが減り、カツラの香りが感じられる 10～11 月
- 特に期待される育みたい資質・能力（例）
  - 批判的に考える力
  - 未来像を予測して計画を立てる力
  - 進んで参加する態度
- 関連する教科単元（例）
  - ５年理科　流れる水のはたらき（川原の石、流れる水のはたらき、わたしたちのくらしと災害、川の観察）

・　５年理科　植物の発芽と成長（種子が発芽する条件、種子の発芽と養分、植物が成長する条件）
・　５年社会　わたしたちの生活と環境（自然災害を防ぐ、わたしたちの生活と森林、環境を守るわたしたち）
・　４年社会　水はどこから（わたしたちが使う水はどこから、ダムの働き、森の働き、水のじゅんかんについて考える、水の流れをまとめる、大切な水のために

3)　１年生　秋をたのしもう、どんぐり拾い（付随して図画工作等）

● 学習のねらい

秋を思いっきり楽しみ、季節や自然を体感することで生徒の感性を高め、愛着と誇りを持って赤谷プロジェクトに関わるきっかけを創出する。また、自然と親しむ態度や心構えを身に付ける。

● 概要

バスによるアクセスが良く、実施時期にどんぐりやきのこ等の秋の自然が楽しめる赤谷のフィールド（いきもの村等）で、生活科の単元として１時間程度自然観察や木の実採集を行う。また、赤谷プロジェクトから比較的高標高域に自生するミズナラのどんぐりを提供し、図画工作等に役立ててもらう。

● 実施時期：10 月中旬（どんぐりの状況を踏まえて９月に入ったら日程調整を始める）

● 特に期待される育みたい資質・能力（例）

・　他者と協力する態度
・　つながりを尊重する態度
・　進んで参加する態度

● 関連する教科単元（例）

・　１年生活科　がっこうをたんけんしよう（こうていをたんけんしよう）
・　１年生活科　きせつとあそぼう（はるからなつ、あき、ふゆ）
・　１年生活科　ちえとわざのたからばこ（かんがえるわざ、かんさつのしかた）

4)　学校教育とは切り離した、植栽イベント

● イベントのねらい

赤谷の森づくりや赤谷プロジェクトに地域住民が関わるきっかけを創出する。

● 概要

学校がどんぐり等の木の実を苗として育てるための支援を赤谷プロジェクトが必要に応じて行い、赤谷の森でその苗を植樹することが適当な現場が生じた際には、学校と相談しながら植樹イベント等を開催する。苗づくりにおいては、どんぐりの採集場所と樹種が明確であるように注意して管理する。尚、植樹場所は赤谷の森に限らず、潜在自然植生に配慮するよう助言しながら赤谷プロジェクト以外の主体が地域内で植樹することを歓迎する。